筏の音

――わが幼時の記憶――

折口信夫

青空文庫

わが車は、とある村に入りぬ。
軒ごとに吊りほせるかけ菜の、あるかなきかの風にゆらめきて、鶏のこゑ、長閑にきこゆ。
轍におこる塵かろく舞ひ、藪ぎはの緋桃の花、ほろり〳〵散る。高安の春、いま闌なり。
いつしか、村をはなれつ。から〳〵と軋り行く※(おほわ)の右左、みだれ咲く菜の花遠くつゞきて、蒸すばかり立ちのぼる花の香の中を、黄なる、白き、酔心地に蝶の飛びては憩ひ、いこひてはとぶ。いづこともなく、笈のおときこゆ。
見れば、わが行く手にあたりて、常緑樹の森あり。音は、其方より聞え来るなり。
此音を耳にして、われは、ゆくりなくも、旧き記憶をよびおこして、回想の忘れ路をたどりぬ。
恋(こひ)の淵(ふち)・峯の薬師・百済の千塚(ちづか)など、通ひなれては、そなたへ足むくるもうとましきに、折しも秋なかば、汗にじむまで晴れわたりたる日を、たゞ一人、小さき麦稈帽子うち傾けて、家を出でつ。
山鳩の、梢に羽ぶく音だに聞ゆる淋しき山路を、「あゝ正成よ」など、高らかにうたひつゝ登る。
この道は、平群(へぐり)の檮本へ出づるなりとか。
もみぢにはまだしけれど、聞きおよぶ竜田へは二里をこえずと、よべ乳母の語れるに、いでさらばと志しゝなりき。
行けど〳〵山かさなりて、峠なほ遥かなるに、日はゝや大阪の海に傾きかゝり、大空は、いよゝ青ずみて、行きかふ雲だになし。
夕べの山路には、人かどふ神の出るものよと聞けりしかば、暮れはてぬ程にともと来し道をひたくだりに走せくだる。
山の尾をいくめぐり、谷にそひ、谷をわたり、森のかげ路のをぐらきには、落葉ふむ跫音にもおびえつゝ、やゝ里近くなりたる処に、山畠の陸稲(をかぼ)の、方一反、波うちかへすが中に交りて、大きなる柿の木の枝もとをゝに実りたるが、折からの入日をうけて立ちたる。と見れば、その木の本に小家ありて、其内より機おり唄のきこえ来るならずや。
ひそ〳〵と忍びよりて障子の穴よりうかゞふに、さだすぎたる女の、頬にみだれかゝる髪かきもあげで、泣きてはうたひ、唄ひては泣き、何になくらむ、かなしげにうたへるなりき。
様は遠州浜名の橋よ、いまはとだえて音もせぬ。
さては此女、柿主(ぬし)なりなと思ひつゝ、手ごろの石拾ひあつめ、柿の木にむかひてうちつくるに、二つ三つ四つ、がさ〳〵と音して、叢にまろび落ちたるを、袂におしいれて、立ち上らむとする時、「たそ」と咎むる声して、障子さとうち開き、見いだしたるは、かの女なりき。
一目見るより、われは背戸のふし垣ふみこえて、走り出でぬ。
後につゞく音するに、顧れば、さをなる顔にほつれ毛うちみだし、細き目に涙たゝへたる柿主の女の追ひ来しなりき。
われは立ちすくみぬ。
女は近よりて、やにはにわが手をぐと把(と)りぬ。われは恐れと羞恥(ひとみしり)とに、泣かむとせしも、辛うじて涙かくしぬ。
握られたる手には、女のはげしき呼吸にうち震ふ肩のをのゝきの、伝ふならずや。
若子、今うち落しゝ物、かへし給へ。

こはき顔して見入るに、われは噤みぬ。
　かへし給はずや。
　いな〳〵、われは柿はとらじを。
と云ふに、女の肩いよゝをのゝき、把られたるわが手、亦、いたくふるひぬ。
　よし〳〵、かへし給はずば、明日にも若子が家人に告げん。
と云ふに、捕へられたる手うちはらひて遁れんとする袂より、紅の珠二つ三つ、ころ〳〵と転び出でぬ。
　それ見給へ。
と女は冷かに笑みて、わが顔を覗きこみぬ。われはえ堪へず、声あげて泣きぬ。
頬を伝ふ涙はらふ〳〵、逃げ下りつ。
裾曲を流るゝ里の小川の板橋に立ちて、ふりかへりぬ。
見上ぐれば、靄こめたる山畠の小家には、早や灯きらめきぬ。
かすかにきこゆるは箴うつ音。
家にかへれば、乳母は、わがかへりおそきを案じわびて、門にたゝずみ居たりき。
ありし事は、小さき胸一つに秘めて、其夜は早く寝床にまろび入りぬ。
其夜の夢は、千塚(ちづか)の極尾(はつを)の神のあらはれて、われに貸しおきつる斎(いは)瓮(べ)をかへせ、とせめしなりき。
夢さめて、われは、かの女は塚の神ならざりしかなど思ひて、暗き寝床の内に、ひたと乳母の身により添ひぬ。
明くる日、柿うりの女、入り来ぬ。
われも欲しければとて、門へ出でんとせしも、其女の声を聞きて、たちすくみぬ。
乳母は、幾度かわが名をよびつ。されど、われは、はなれ家にかくれて、いらへもせざりき。
やゝして柿売りのかへりし頃、母屋に来て、堆く、くづるゝばかりうみたる、赤く大いなるが盆に盛られたるを見し時、其は斎瓮の埴の赤珠にあらずや、とたづねて、
　若子は、ねおびれたりや。
と嗤はれぬ。たとひ其時には、昨日の恐しかりしをも忘れて、貪り喰ひつれど。
されど、われは今もなほ、其斎瓮にあらざりしかを疑ふなり。
ふと心づけば、車は若江の邑の畷にかゝれり。
道のかたへなる石ぶみにぬかづきて、重成の霊に、十年ぶりの今日のあひをよろこぶ。
また車に上る。恩智川の堤は、見え初めぬ。かのかげろひ立てる堤をこゆれば、わがめざしたれつつ、十年の月日を過しゝ、里親の家も見ゆるなるべし。山畠の機おり女は、今も、まさきくありや。
前路遠くして、わが行く道、なほ遥々(えうえう)たり。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆25　音」作品社
1984（昭和59）年11月25日第1刷発行
1999（平成11）年4月30日第17刷発行
底本の親本：「折口信夫全集　第三十巻」中央公論社
1968（昭和43）年4月初版発行
入力：門田裕志
校正：多羅尾伴内
2003年12月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

筏の音

――わが幼時の記憶――

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　折口信夫
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/